

鹿 1 3 浄瑠璃御前〔姫〕と鹿 = = = 猪・鹿・狸より

鳳来寺の伝説では、光明皇后は鹿の胎内より生まれ給うたとなっている。開祖利修仙人が、かつて西北方ある煙巖山の岩窟に籠もって修行中、一日山上に出て四方を観望するうち、たまたま尿を催して、傍らの薄に放したところ、おりから一匹の雌鹿来たりてその薄を舐め、たちまち孕んだとある。月満ちて玉の如き女子を産んだが、仙人



人修法中とてその処置に窮し、ひそかにその子を人に托して郷里奈良に遣わし、一日あるやんごとなき邸の門前に捨てしむと言う。その女子成長して後に光明皇后となり給うたが、鹿の胎内に宿り給いし故、生まれながらにして足の指二つに裂け、あたかも鹿の爪の如くなりしと言う。皇后これを嘆き給い、宿業滅亡のため鳳来寺に祈願を籠め、かねて御染筆の扁額を納め給うと言うのである。これは『鳳来寺寺記』の中に載せたことであったが、別に元禄時代に書いた、同寺所蔵の『掃塵夜話』と言う写本には、そのことを実際化して、利修無聊によって、夜々西方山麓の里に通い、賤の女と契りついに一女をもうく云々などと、もっともらしく説明してあった。

しかし自分らが耳で聞いた伝説では、これとはやや趣を異にして、浄瑠璃御前〔姫〕の話になっていた。矢作の兼高長者が、子のないことを憂いて、薬師堂に三七夜の参籠をして、子種を一つ授け給えと祈ったところ、あたかも満願の夜の夢に、薬師は大なる白鹿となって顕れ、汝の願い切なるものあれども、ついに汝に授くべき子種はなければとて、一個の丸を授けらると見て、胎むと言うのである。また別の話では、薬師が白髪翁となって現われ、鹿の子を授くと告げて消え失せ給うたとも言うた。やがて月満ちて生まれた子が浄瑠璃御前で、輝く如く美しかったが、足の指が二つに裂けていることを、長者が悲しんで、それを隠すため布をもってその足を纏うておいたが、これが足袋の濫觴であると言う。

今から三、四〇年前までは、浄瑠璃御前一代の譚として、そのことを謡った文句を歌っていたものもあったそうであるが、今日では、如何にしてもそれを聴くことは出来なかった。また村の処々に御前の姿を描いた小さな掛け物を蔵ってある家もあったと言う。

一方、鹿の話は、それからそれと糸を引いて、妹背山の入鹿の話にまで持って行った。鳳来寺の東方山麓に、東門谷と言う山に囲まれた、小さな部落があ

るが、村としては古かった。そのの、弥右衛門某の屋敷の背戸に、いるかが池とて形ばかりの赤錆の浮いた池があったと言う。鹿が入鹿大臣を産んだ処故にかく言うたとは怪しかった。その池の水を笛に湿して吹けば、如何なる鹿でも捕れるなどと言うたが、果して今も跡があるかどうか知らぬ。あるいは鹿が子を産んだと言う伝説と、いるかが子を産んだ話と、何れかを誤り伝えたかとも考えられる。東門屋から峯一つ越えた、鳳来寺村峯の地内にある産田（うぶた）は、前に言うた鹿が皇后を産んだ跡と言うている。